

C-73 肺癌化学療法における rG-CSF 投与時期に関する検討

長崎肺癌研究会、長崎大学第2内科

○福田正明、中野正心、木下明敏、渡辺講一、伊藤直美、坂本晃、藤野了、荒木潤、早田宏、原耕平

【目的】肺癌化学療法における rG-CSF の投与方法とくに投与開始時期や投与期間などについては未だ検討の余地を残している。非小細胞肺癌患者に対する MVP (MMC 8 mg/m²: day 1, VDS 3 mg/m²: day 1, 8, CDDP 80 mg/m²: day 1) 療法における rG-CSF (ノイトロジン®) のより効率的な投与時期を検討した。

【対象と方法】PS 0-2, 75 才以下の非小細胞肺癌患者を対象とした。化学療法のみを対象群と rG-CSF 投与時期を異にする群 (A 群: day 2 より 14 日間連日投与, B 群: day 8 より 14 日間連日投与, C 群: 好中球数 1,000/μl 以下で開始し, 中止基準まで投与) を設け, 白血球数, 好中球数などを比較検討した。

【結果】現時点で 26 例 (対象群 10 例 18 コース, A 群 5 例 7 コース, B 群 6 例 10 コース, C 群 5 例 8 コース) が解析可能である。それぞれの群の好中球の nadir 平均値および好中球数が 1,000/μl 以下の期間は対象群 413/μl, 6.72 日, A 群 547/μl, 2.29 日, B 群 2,862/μl, 1.3 日, C 群 355/μl, 4.63 日であった。好中球減少 (< 1,000/μl) に伴う 38℃ 以上の発熱の頻度は各々 6%, 33%, 0%, 71% であった。

【結論】現時点での解析では MVP 療法における rG-CSF の投与時期は抗癌剤投与後 1 週間後からが適当と考えられる。

C-75 インターロイキン-1 (IL-1) を併用した肺癌化学療法の検討

金沢大学第三内科

○中積泰人、吉田 喬、柴田和彦、笠原寿郎、安井正英、小川晴彦、斎藤元泰、野村将春、藤村政樹、中村 忍、松田 保

目的: IL-1 は悪性黒色腫細胞株等に対する抗腫瘍作用などが知られているが、我々は動物実験において放射線・制癌剤の抗腫瘍作用に対する IL-1 の増強効果を報告してきた。今回肺癌において化学療法の効果増強を目的に IL-1 を併用して検討したので報告する。

対象と方法: 当科に入院した原発性肺癌患者 13 例を対象とした。小細胞癌は 2 例 (未治療 1 例, 既治療 1 例)、非小細胞癌は 11 例 (未治療 7, 既治療 4) で Ad 6 例, Sq 4 例, La 1 例であった。小細胞癌に対して CDDP・VP、非小細胞癌に対して CDDP・VDS・MMC (MVP) あるいは CBDCA・VP を投与した。IL-1 は制癌剤投与 2 日前より 3 万単位を 1 日 2 回 5 日間皮下注した。

結果: 抗腫瘍効果は小細胞癌では 2 例中 CR 1 例, NC 1 例、非小細胞癌では MVP で 8 例中 PR 4 例, NC 3 例 (MR 2 例), PD 1 例で奏効率 50%、CBDCA・VP で 1 例中 PR 1 例であった。全体の奏効率は 55% であった。

1 例は大咯血のため早期死亡、1 例は IL-1 投与後喘息発作が出現し中止した。他の副作用としては発熱、注射局部痛などで重篤なものは認めなかった。

結語: IL-1 併用の化学療法は有用と考えられた。今後さらに検討が必要である。

C-74 ED-SCLC に対する CODE 療法

-G-CSF 併用の randomized trial -

大阪市立桃山市民病院内科¹、大阪府立羽曳野病院第2内科²、国立療養所近畿中央病院内科³

○根来俊一¹、瀧藤伸英¹、福岡正博²、高田実²、益田典幸²、児玉長久³、河原正明³、古瀬清行³

ED-SCLC に対する CODE 療法 (dose intensive weekly chemotherapy) の有効性と、G-CSF を併用することにより高い dose intensity を維持し、治療効果をさらに高め得るかを randomized trial で検討した。CODE 療法は cisplatin 25mg/m² を毎週、Oncovin 1mg/m² を第 1 週とその後偶数週、doxorubicin 40mg/m² と etoposide 80mg/m² x 3 (iv) を奇数週に投与する方法で行なった。G-CSF (KRN-8601) (+) 群は 50mg/m² を抗癌剤投与日以外の毎日皮下投与した。'89 年 5 月から '91 年 9 月までに 64 例が登録された。G-CSF 群 (+) に女性が有意に多かった以外は両群間に背景因子に差はなかった。

結果は次の通りである。

		CR	CR+PR	MST	発熱
G-CSF	n	%	%	wks	>38°C, %
+	32	34	97	58	44
-	31	23	84	32	77
P-value		P=.07	NS	P=.004	P<.01

以上より CODE + G-CSF は ED-SCLC に対して有効な治療法と考えられ、標準的的化学療法との比較試験が推奨された。

C-76 CDDP を含む化学療法中の制吐剤無作為化比較試験 (High-Dose Metoclopramide + Dexamethasone vs Granisetron + Dexamethasone)

国立がんセンター内科¹、薬効試験部²

○大松広伸¹、江口研二¹、唐渡敦也¹、有岡仁¹、国兼浩嗣¹、中島創¹、岡元るみ子¹、重光希公生¹、寒川卓哉¹、新海哲¹、佐々木康綱¹、大江裕一郎¹、田村友秀¹、西條長宏²

目的: CDDP を含む化学療法時の悪心、嘔吐に対して、Granisetron + Dexamethasone (GRN+Dx) の制吐効果を、現時点での標準的制吐法のひとつと考えられる High-Dose Metoclopramide + Dexamethasone (HDMP+Dx) と比較検討する。方法: CDDP を 80mg/m² 以上含む regimen で化学療法を行う 79 才以下の原発性または転移性肺癌患者を対象とした。前治療の有無により層別化し、無作為化割付による cross-over study を行った。化学療法第 1 日目を early emesis、第 2-6 日目を delayed emesis とわけ、嘔吐回数、悪心の程度 (10cm の visual analog scale = VAS により判定) を比較検討した。結果: 1992 年 5 月 31 日までに 46 症例が登録され、この時点での評価可能 27 例を対象に中間解析を行った。化学療法第 1 日目において、嘔吐に対する奏効率は HDMP+Dx 群 70% vs GRN+Dx 群 96% (p=0.011)、VAS では HDMP+Dx 群 4.00cm vs GRN+Dx 群 1.02cm (p=0.0004) であり、GRN+Dx 群の制吐効果が有意に優れていた。化学療法第 2-6 日目では、嘔吐に対する奏効率は HDMP 群 70% vs GRN 群 59% (p=0.393)、VAS では HDMP 群 4.42cm vs GRN 群 4.21cm (p=0.747) であり有意差を認めなかった。この中間解析の結果をふまえ、症例登録を 6 月中に終了し、現在進行中症例のデータを合わせて結果を発表する。